高知県立文学館
高知県立文学館ニュース
藤並の森
Vol. 63

▲旭斉国輝画「帝国議会衆議院銘鑑」（明治23年・高知市立自由民権記念館蔵）
左上に、この年衆議院議員となった植木枝盛の名が見える。

リレー随筆

植木枝盛の読書

谷川恵一

西洋医学がまだわが国に伝わっていなかった頃の話である。江戸の小塚原で罪人の死体の腹の中をのぞいてみると、中国の医学書に描かれている胎内の様子とずいぶん違っていた。これはどうしたことだろうと不思議がる人に向かって、「医学書がおかしいのではなく、この人間の身体の方が間違っているのだ」と言い放った者がいたという。これは今から130年ほど前に植木枝盛が『無天雑録』の中に書きとめている話です（明治18年6月2日）。この話をわざわざ書きとめていることからもわかるように、書物を金科玉条とすることを植木は徹底して拒否します。どんな本を読む時でもその本に打ち勝とうと思って読まなくてはいけない。「孔子ノ書ヲ読ムトキハ孔子ニ打勝タント思ヒ、弥爾（みる）ーイギリスの思想家J.S.ミルーノ書ヲ読ムトキハ弥爾ノ論説ニ打勝タント思フテ之ヲ読ムベシ」。そうしないで、本に書いてあることを頭から信じてかかると、結局自分以外の者に自己を乗っ取られてしまうだけだ、と植木はいっています（『無天雑録』、明治13年1月8日）。明治維新の10年ほど前に土佐で生れた植木は、西洋の文明と向き合った過渡期の青春を全身で生き抜き、民権自由の理念に生命を吹き込んだのですが、その読書論にも彼のそうした歩みが色濃くにじみでています。

日々考えたことを書き留めた『無天雑録』には読書にまつわる多くの記事が含まれ、また、自分が買った本と読んだ本について生涯にわたって綿密に記録していったことに示されるように、植木枝盛は本を読むことについてたいへん意識的な人でした。残された記録からは約1600点の本のタイトルを拾うことができますが（ただし、読んだ本と買った本を重複して数えています）、彼はこうしたかなりの量の本を漫然と読み飛ばしていたわけではありません。そこには、ミルの『代議政体』（明治8年）をはじめとした翻訳書や福沢諭吉の本はもちろん、老子や徒然草といった古典から、果ては市井の男女の機微を描いた江戸の人情本まで、実に幅広いジャンルの本が顔を出します。こうした記録を手がかりに植木枝盛の読書の営みを復元していくことは、ともすれば抽象的な理念として捉えられがちな彼の思想に、再び生き生きとした経験の様相を取り戻すことにつながるでしょう。

幸い、ネットワークに繋がったパソコンさえあれば、今日では植木が読んだ本のうちのかなりのものを自宅で誰でも手軽に読むことができるようになっています。植木の歩いた道を散歩がてらのぞいてみることをおすすめします。

（国文学研究資料館 副館長）

展覧会紹介 Exhibition

近代文学のあけぼの展
自由民権運動と文学

平成25年
12月7日(土)
▼
平成26年
1月31日(金)
※12月27日～1月1日は休館となります。
観覧料400円

自由民権運動は、「よしや南海苦熱の地でも　粋な自由の風が吹く」の「世しや武士」で知られる高知県を中心に、全国に広がっていきました。そして、民権思想を伝えるための有効な手段として、政治小説や翻訳小説、詩歌が活用されるようになりました。

本展覧会では、明治初期の自由民権運動との関わりを踏まえつつ、高知県出身の坂崎紫瀾・宮崎夢柳・植木枝盛を中心とした人々が、それまでの文学の既成概念を打ち破っていかに「近代文学のあけぼの」を築いていったのかをご紹介します。

激動の時代にひときわ輝く、高知人スピリッツを感じてみて下さい。

展示構成

一　登場人物紹介
―紫瀾・夢柳・枝盛について

展覧会の中心となる、坂崎紫瀾、宮崎夢柳、植木枝盛の三人について、高知県出身の漫画家・JETさんのイラストを交えつつ、紫瀾の「自筆年譜」や枝盛の書「勤則不匱」、夢柳直筆の漢詩など、貴重な資料をご紹介します。

・坂崎紫瀾（さかざき・しらん）
1853（嘉永6）～1913（大正2）
坂本龍馬を描きながら、自由党の民権思想と結びつけた作品『汗血千里の駒』などで知られる。

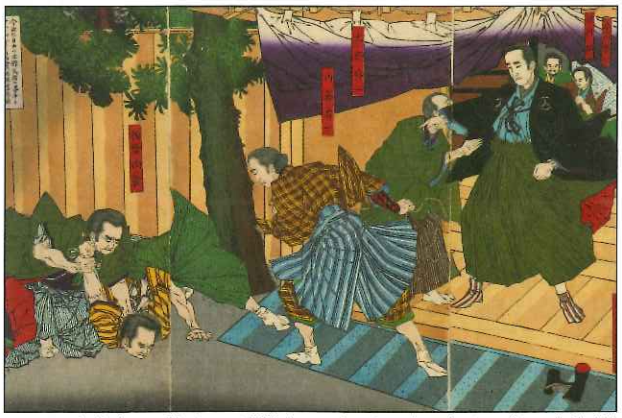
・宮崎夢柳（みやざき・むりゅう）
1855（安政2）～1889（明治22）
「自由新聞」や「高知新聞」でフランス革命やロシア虚無党を題材にした翻案小説を発表、自在な脚色で一世を風靡した。

・植木枝盛（うえき・えもり）
1857（安政4）～1892（明治25）
『新体詩抄』に倣って書いた『自由詞林』などの民権詩歌は、日本近代詩のさきがけの一つとなった。

二　近代国家の設立と自由民権運動

高知で自由民権運動が起こったのは、孤立的で反権力的な歴史の伝統や風土に加え、開明的で進歩的な思想を持つすぐれた指導者に恵まれたことが大きな要因と考えられます。

立志社の片岡健吉が書いた「建白書」の写し（明治10年・高知県立図書館蔵）など、高知県に残されている自由民権運動関係の資料や、新聞・雑誌などに描かれた当時の流行や暮らしぶりなどをご紹介し、明治初期の雰囲気を味わっていただきます。



▲一陽斎豊宣画「板垣君遭難之図」（明治15年・自由民権記念館蔵）

三　近代文学のあけぼの
―自由民権運動と文学

i　ニューメディア―新聞と文学

明治時代になると、文明開化の風潮も後押しし、新聞がたくさん創刊されました。そして、各政党が新聞を活用し、それぞれのイデオロギーの浸透を図るようになります。

自由民権運動が活発になり、政府批判が増えると、政府は新聞の言論弾圧に乗り出しました。もちろん新聞側もそれに対抗します。例えば「高知新聞」（※現在の高知新聞とは違うものです）は、発行禁止処分に対する抗議の意味を込めて「新聞の葬式」を行い、紫瀾が祭辞を読み上げたそうです。このエピソードからも、土佐人の反骨精神が窺えます。

「土陽新聞」や新聞小説の挿絵など、当時の新聞に関する資料を展示します。

ii　政治小説の隆盛　立身出世の夢―紫瀾

政治小説とは、政治やそれに関わる事物を主題とする小説、もしくは特定の政治思想を鼓吹することを目的として書かれた小説を指します。自由民権運動が盛り上がる明治12、3年頃から20年代初期に多く書かれ、政党によってそれぞれの政治理念が政治小説の中に込められています。

坂崎紫瀾は、坂本龍馬を描いた『汗血千里の駒』（明治16年）など、幕末維新時に活躍した人々を題材とし、そこに自由党の理想を描いています。

当時の人々が思い描いていた理想を、小説から感じてみて下さい。

展覧会紹介 Exhibition

近代文学のあけぼの展
自由民権運動と文学

平成25年
12月7日(土)
▼
平成26年
1月31日(金)
※12月27日～1月1日は休館となります。
観覧料400円

iii 外国小説の翻訳 海外への憧れ―夢柳

自由民権運動に関わった人々の多くが翻訳小説を発表したのは、単に新しい文学を紹介するためだけではなく、自由民権思想を広めるための手段でもありました。

中でも宮崎夢柳は、明治初期の翻訳小説を考える際に外せない重要な人物です。大好評を博した夢柳のデュマの翻訳『自由の凱歌』(明治21年)は、デュマの思想の合間に自由民権思想を盛り込んでおり、忠実な翻訳ではなく「翻案」と言うべきものです。

当時の若者達が熱狂した、翻訳小説をご紹介します。

▲宮崎夢柳著『自由の凱歌』

▲坂崎紫瀾著『汗血千里の駒』

iv 新体詩の誕生 書き言葉から話し言葉へ―枝盛

明治時代になると、話し言葉(口語)と書き言葉を同じものにしていこうという「言文一致運動」が起こります。明治10年代には口語で書かれた、いわゆる「新体詩」という試みがなされていました。新体詩の中で特に有名なのは外山正一・矢田部良吉・井上哲次郎著『新体詩抄』(明治15年)です。この『新体詩抄』等に倣って作られた植木枝盛の『自由詞林』(明治20年)は、わかりやすい話し言葉で自由党の主張を歌った詩というだけでなく、当時としては比較的整った、調子の高いものと評価されています。

このコーナーでは、新体詩や唱歌など、わかりやすい口語で書かれた当時の詩をご紹介します。

※その他、関連展示として、
- **オッペケペー節で歌おう！(参加型展示)**
- **明治の風を感じよう！**
  近代文学散歩(パネル展示)
- **JETさんコーナー**
  等を予定しています。

紫瀾や夢柳、枝盛の直筆資料や、現在は手に取ることの難しい貴重な書籍の数々をご覧になることができる展覧会です。皆様どうぞお見逃しなく！

(学芸課／永橋禎子)

関連企画

●記念講演会「植木枝盛の読書」

明治初期の翻訳や小説について研究されている国文学研究資料館副館長の谷川恵一先生にお話いただきます。

日　時：2013年12月8日(日)　午後2:00～3:30頃　　場　所：高知県立文学館1Fホール
講　師：谷川恵一氏(国文学研究資料館　副館長)　　参加費：**当日観覧券が必要**となります。
申　込：電話または文学館受付にて事前申し込み。(定員100名)

●お正月特設コーナー「明治を遊ぼう！」

かるた、めんこ、すごろく、ペーパークラフト……明治期に流行した遊びを自由に体験できます。

日　時：2014年1月2日(木)～5日(日)　終日　　場　所：高知県立文学館1Fこどものぶんがく室
参加費：**無料**　　申　込：不要(当日、直接会場までお越しください)

●工作イベント「カイロを作ろう」

寒い冬の必需品！　電子レンジでくり返し使える、アズキを使ったエコなカイロを作ってみませんか？
紫瀾・夢柳・枝盛の干支であるウシ、ウサギ、ヘビを模した可愛らしい外カバーも作ります。
※中学生以上対象

日　時：2014年1月13日(月・祝)　午後2:00～4:00頃　　場　所：高知県立文学館1Fホール
参加費：**当日観覧券と材料費 800円が必要**となります。
申　込：電話または文学館受付にて事前申し込み。(定員50名)

●文学散歩「近代文学のふるさとをめぐる」

高知市内にある紫瀾や夢柳、枝盛のゆかりの地をめぐったあと、最後に料亭・濱長で芸妓さんの歌う「民権かぞえ歌」(枝盛作)や「民権都々逸」(紫瀾作)を聞きながら、少しリッチなお昼ご飯をいただきます。

日　時：2013年12月22日(日)、2014年1月20日(月)
場　所：高知県立文学館集合～市内の自由民権関係の地を散策～濱長
参加費：**参加料4,000円ほど**を予定
申　込：電話または文学館受付にて事前申し込み。(定員各20名)

☆展示解説
展覧会担当者による展示解説を行います。
毎週土曜日
各日とも午後1時半～(約30分)
参加には**当日観覧券**が必要です。
直接会場にお越しください。

他にも朗読の会(2014年1月18日開催)など盛りだくさんの関連企画でお待ちしています。

鏡川のほとり

嶋岡 晨

土佐の高知
潮江の天神町
鏡川の土堤にわが家はへばりついていた
若いわたしは　しばしば土堤の道に上がり
沈む夕日や大雨のあとの濁流を
眺めあきなかった
すべてがそこから始まっていた
（貧しい人生ドラマとはいえ）
壮年の父と泳ぎを競った流れ
引き潮どきには母と
しじみを採りに行きもした
狭い堤の道では　すれちがった
いくつもの人生と

妻や子と手をつなぎ散歩もした川のほとり
ひとり酔って何かに怒り喚きもした
次々に小さなドラマは流れさった

ボート小屋　橋のたもとの茶店　古い旅館
愚かに夢みた詩人のことばも
たちまち流れさり
見知らぬ若い人たちも
流れてきては消えさり

わたしの人生もやがて誰からも忘れられ
子どもがたちまち老人になるように
鏡川に映る故郷の町も人も　消える
あの大空襲のあとよりはかなく

それでもなお若い日日はよみがえり
よみがえり　天神橋の辺りでボートを漕ぎ
誰にも認められないままであれ
それが青春だった　と訴えつづけるだろう
やがて地上に別れる者に代わって
歌いつづける魂が
せっせとオールを操って。

（しおりちゃんに贈る老人の詩）

トピックス

◆嶋岡晨先生より詩が届きました！

詩人の嶋岡晨先生から、文学館オリジナルグッズのしおりのクリアファイルをお送りしたお礼にと、素敵な詩を送って頂きましたので、ご紹介したいと思います。いつもふるさと高知を大切に思ってくださっている、嶋岡先生。

この詩の原稿は、さっそく、常設展展示室の先生のコーナーに展示させていただきました。とてもていねいな、きれいな字で書いてくださっています。先生、本当にありがとうございました。

（しおりより）

高知県立文学館
オリジナルグッズ
しおりちゃんクリアファイル
（税込 250円）
当館ミュージアムショップ
にて好評販売中です！

館長室から

「創業と守成」

元吉　喜志男

昨年度は開館15周年という節目の年であり、館発足時に託された初心やこれまでの様々な取り組みの道程、それらを踏まえて次のステージへ向けての飛翔へつなげられればとの思いから『開館15周年記念誌』を策定しました。

平成5年に高知県文化財団に開設準備室が設置された頃は、ご遺族から県へ寄託されていた寺田寅彦の資料が600点あるだけで、他の資料はゼロからの出発であったようです。

記念誌の編集を通じて、企画展や教育普及事業の内容の変遷など、今日に至るまでの歩みとその間の関係者の方々のご苦労を改めて深く再考するよい機会となりました。

もっとも、設立当時と比べると、時代の変遷とともに全国的に文学館を取り巻く環境も随分変化していることは、こうした分野に携わっている人なら誰しも感じていることでしょう。当館も平成18年度からは指定管理者制度が導入され、今年度は第Ⅱ期目の最終年度を迎えています。第Ⅱ期の運営に託された命題は、大きくは「①若い層を意識した事業展開、②リピーターにも新鮮さを感じていただける館運営、③観覧者数や収入増を目指した取り組み」という3つの視点でした。発足時の初心である館設置の趣旨に立ちつつも、こうした命題にもしっかり結果を残していくことを考える時、『十八史略』の**「創業と守成はいずれが難きや」**の言葉が浮かんできます。

館員全員が力を合わせての努力や挑戦により、ここ数年観覧者等は増加基調にあり、15周年目を迎えた昨年度は、開館以来最高の観覧者数と収入実績が残せました。また、アンケート調査のデータ等では、20歳未満の観覧者の構成比も過去最高と若い層の来館者も大きく増加しています。

創業の理念を受け継ぎながら、変化する時代の海原を力強く漕ぎ抜いていける館を目指して、指定管理者として提出している第Ⅲ期計画の実現に向けて舵をきってゆかねばと考えています。

土佐文学さんぽ 62

タカクラテルのふるさと ―黒潮がうんだ大型作家― 猪野 睦

いまは合併して黒潮町になったが、左手に太平洋を眺め、佐賀から大方にいたる海岸線を、ここがタカクラテルの幼少期を過ごしたところかと思いながら走った。

その浮鞭は鯨の泳ぐことで観光客を集めている海がひろがり、黒潮町という名もふさわしく思えた。

この黒潮町のかつての大方町では二人の文学者がでた。タカクラテルと上林暁である。上林暁は私小説家となって出身地田ノ口の人びとの暮らしと、わが一族を手にとるようにかきついだ。この上林小説にはファンも多い。

タカクラテルは戦後にかく「青春と私」のなかに「わたしが生まれた(1891年)のは、足摺岬に近い高知県幡多郡七郷村(今の大方町)の海岸で、全国で最も不便な所の一つ、やっといま汽車がとおりかかっている。村は、わずかの地主と医者と商人のほかは、貧農とまずしい漁民ばかりだった」とかいた。

小学校をすむと宇和島中学へゆき、あと三高、京大をすみ、文学者になり、信州の自由大学講師となり農民運動、社会運動家になっていく。戦時下は国民文学論、国語国字合理化を主張、名も高倉輝をタカクラテルにして文章を「発言式カナずかい」と「分け書き」を実行した。

戦時下は国家権力とも衝突、しばしば検挙、投獄、敗戦前の1944年には敗戦を見越して脱獄、つかまり戦後になって出獄した。このあと長野県からでて衆議院議員となるが、マッカーサー書簡による公職追放で1959年まで8年間の亡命生活を送った。ケタが大きかった。

戦前、戦中は文壇を相手とせず「都新聞」に「高瀬川」「百姓の唄」「狼」の三部作を連載、また「箱根用水」「大原幽学」など、近世の農民、庶民の生きる力をかきあげた大型作家だった。

このタカクラテルの文学碑は浮鞭のバイパス沿いにあり、その横の副碑は傾斜をもたせ読みやすい形になっている。昔住んだという家跡は、そこから丘状集落へ登る途中の林のなかにあった。丘状集落へ登ると、眼下には大海原というにふさわしい濃紺の黒潮の水平線が見えた。1986年に94歳で没し、この海の見えるふるさとへ帰った。納骨堂には「タカクラ」の4文字が刻みこまれている。

(詩人)

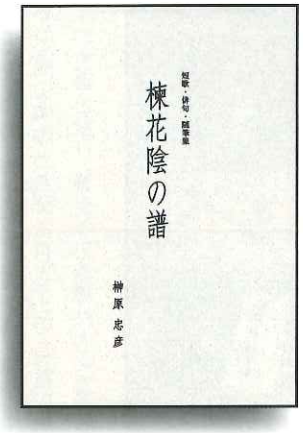
◀浮鞭のバイパス沿いにある タカクラテル文学碑(撮影協力/大方あかつき館)

資料受贈報告

―最近の寄贈資料から―

『短歌・俳句・随筆集 楝花陰の譜』

榊原忠彦著 共和印刷刊
2013年2月 382頁 四六判



あふちばな 風の吹けらば 青春(はる)の日の
師たち顕ちくる 花かげ木かげ

上記の歌は、榊原忠彦さん、20歳の頃の作品です。この歌で結ばれている『楝花陰の譜』には、短歌1017首、俳句157句、随筆は(第1部13編、第2部6編)19編が収められています。短歌は、高知を中心に活躍した歌人故国見純生さんが主宰した歌誌「海風」に寄せた作品を集録。俳句は、平成に入り、奥様と2人で四国八十八カ所巡りをした際に詠んだ句を中心に集録されています。そして、随筆の第1部は「海風」に掲載、第2部は、定年退職後に書かれたものです。榊原さんのお人柄が良く表れた集成とも言える作品集です。

榊原さんは、1926年高知市生まれ、高知師範学校、同志社大学文学部文化学科文化史学専攻を卒業後、高知市内の小学校・中学校・高等学校の教師を長年勤め、定年退職後は、国立高知工業高等専門学校、県立高知短期大学などの非常勤講師を勤められています。また、高知県立文学館の開設準備委員会・専門委員として、古典のコーナーの監修も務めてくださいました。

著書には、『日本文学雑筆』―田宮文学の世界他(近代文藝社)や第19回の寺田寅彦記念賞を受賞した『寅彦と虎彦』(高知新聞企業出版課製作)や日本図書協会の選定図書になった『寺田寅彦と連句』(近代文芸社)奥様の歌を編集された『違歌集 爽風のかたみ』(共和印刷)などがあります。

物理学者であり、文筆家である寺田寅彦と芥川賞を超える作家と評価された田宮虎彦。この二人の「とらひこ」の文学について説いた『寅彦と虎彦』も是非ご一読いただきたい1冊です。

(学芸課長/津田加須子)

受贈報告(平成25年8月) 敬称略

▼**中脇初枝**・「わたしをみつけて 中脇初枝著 ポプラ社刊」▼**食野雅子**・「マジック・ツリーハウス34 パンダ救出作戦 メアリー・ポープ・オズボーン著 食野雅子訳 メディアファクトリー刊」▼**海音寺潮五郎記念館**・「海音寺潮五郎未刊作品集 全4巻 海音寺潮五郎著 海音寺潮五郎記念館編刊」▼**榊原忠彦**・「短歌・俳句・随筆集 楝花陰の譜 榊原忠彦著 共和印刷刊」他 ▼**小松弘愛**・「詩と思想・詩人集2013 「詩と思想」編集委員会編 土曜美術社出版販売刊」▼**山本 衛**・「詩集 黒潮の民 山本衛著 コールサック社刊」▼**横田晴光**・「鬼神の狂乱 坂東眞砂子著 幻冬舎刊」他 ▼**エヌ・アンド・エス企画**・「みたい！しりたい！しらべたい！日本の地獄・極楽なんでも図鑑 ②地獄ってどんなところ？ 松尾恒一監修 山崎 猛絵 ミネルヴァ書房刊」▼**鬣の会**・「句集 午後の円盤 堀込学著 鬣の会刊」他 ▼**寺田寅彦記念館友の会**・「寺田寅彦かるた 寺田寅彦記念館友の会制作」▼**青森県近代文学館**・「(DVD)大町桂月が描いた青森県 青森県近代文学館監修」他

このほか、全国の個人・関係機関の方々から図録など数多くの資料をご寄贈いただきました。厚くお礼を申し上げます。

◆好評の「変わる常設展示」！2名の作家を入れ替えました。

当館では、いつ来ても新しい発見、新たな感動に出会っていただけるようローテーション方式で常設展示の入れ替えを行っています。

今年度の第一弾、詩歌コーナー「槇村浩→島崎曙海」、第二弾・現代の作家コーナー「小山いと子→田中英光」に続き、新たに古典コーナーと大衆文学コーナーの入れ替えを行いました。

入れ替え①【古典コーナー】～紀貫之から鹿持雅澄へ～

▲展示の様子

鹿持雅澄（かもちまさずみ）は、1791（寛政3）年に福井村（現高知市）に生まれ、その人生の大半を万葉集の研究に捧げた国学者・歌人です。

17歳頃までに海南朱子学派の中村隆蔵に入門して漢籍を学び、ついで宮地仲枝（みやじなかえ）に入門。仲枝から国学の手ほどきをうけた雅澄が、万葉集研究の志をたてたのは20歳の頃と言われています。

鹿持家は風雅の名流・飛鳥井家を遠祖に持つものの、家は下級武士であったため、ごく低い役職にしかつけず、その研究人生は生涯貧窮の中にありました。

生涯をかけて研究した『万葉集古義』は在世中には出版に至りませんでしたが、雅澄の死後、明治天皇へ奏上され、ご下賜金により宮内省から出版されることとなりました。その他にも『土佐日記地理弁』、家集『山斎集』など、雅澄の遺した著述は、約70種300巻に及びます。

また、研究の傍ら私塾・古義軒を開き、南部厳男（いつお）、松本弘蔭（まつもとひろかげ）、武市瑞山（たけちずいざん）、佐佐木高行（ささきたかゆき）など、多くの後進の育成にも力を尽くしました。

生前に建てられた雅澄の墓碑には「余以後将生人者古事之吾墾道爾草勿令生曽～私から後に生まれてくる人は、古代文化について、私の切り拓いた道に草をはやさないでくれよ～」と刻まれています。

今回の展示では鹿持雅澄の自筆資料や宮内省版『万葉集古義』など貴重な資料を展示し、雅澄の生涯と業績を顕彰しています。

（学芸課／岡本美和）

▲『万葉集古義』宮内省版刻本（一部）

入れ替え②【大衆文学コーナー】～田中貢太郎から大町桂月へ～

大町桂月は、1869（明治2）年に、高知城下、北門筋八番屋敷（現・高知市永国寺町）に生まれ、明治後期から大正期にかけて、詩歌、随筆、評論など、幅広い分野で筆を執った文人です。本名は芳衛、号桂月は月の名所桂浜に因みます。

修学のため11歳で上京し、苦学の末、東京帝国大学文科大学国文科を卒業。在学中より能文家で知られ、合著『美文韻文 花紅葉』で脚光を浴びました。

1900（明治33）年、博文館に招かれ、「太陽」「文芸倶楽部」「中学世界」といった同館発行の諸雑誌に、文芸時評、評論、紀行文などを執筆。硬派の評論家として高山樗牛（ちょぎゅう）と並称されます。のち、冨山房の「学生」の主筆となり、青少年の善導に力を注ぎました。

▲新収蔵資料 桂月書「天有酒星」他

桂月は東洋文人の典型で、酒と旅、自然を愛し、数多くの紀行文を残しています。青森県の十和田湖とその周辺を叙した「奥羽一周記」は特に名高く、秘境十和田の山水美が世に広く知られるきっかけとなりました。晩年、桂月はこの地に本籍を移し、熱愛の地、蔦温泉に没しています。

今回の展示では、桂月の二大趣味である酒、旅を主軸に構成し、近年の新収蔵資料を盛り込んで紹介しています。また、青森県近代文学館の企画展「大町桂月が描いた青森」とも連携。当館では、桂月の旅先の中から高知、青森を取り上げ、青森県近代文学館では、当館の新資料についてパネルでご紹介いただいています。連携展示を通じ、鉄脚の文人桂月が結ぶ、高知と青森の縁なども感じていただければ幸いです。

（学芸課／小松路代）

▲展示の様子

好評開催中！

紀貫之と『土佐日記』展

子どもから大人まで楽しめる、はじめての古典の展覧会。

今回の紀貫之と『土佐日記』展は、大岡信ことば館館長の岩本圭司氏ご夫妻やスタッフの皆様に大変お世話になりました。

昨年、静岡県三島市にある大岡信ことば館で全国文学館協議会が開催されました時、展示空間の巧みな表現に感動。「高知県立文学館の展示空間を利用して、古典文学の世界を表現できないものか」と考え、早速、岩本館長にご相談しました。その結果、2階ロビー、展示室内に文字と朗読と光と影と自然を身体で感じ、楽しんで頂ける展示空間が完成し、来館の方々には、大変喜んで頂いております。

▲展示室風景

それともう一つ。文学館本来の役割であります貴重な実資料の数々を紹介しています。当館では、高知の古典から現代作家まで幅広く紹介していますが、『土佐日記』をこれまで取り上げることはありませんでした。

しかし、幸いなことに故田中瀧治(高知市)さんから寄贈いただいた資料の中には、近世以降の『土佐日記』の版木で刷られた研究書・注釈書のほとんどがありました。『土佐日記考証』岸本由豆流著など再版を重ねた書籍も年代を追って残されており、今回の展覧会で紹介しています。

また、高知県に唯一残されている伝紀貫之の『月』字額の版木や由来書(黒潮町伊田地区所蔵)やレプリカではありますが、国宝の『定家本土左日記』『高野切第廿巻』重文の『北野天神縁起』など貴重な資料を期間限定で紹介しています。

さらに、関連イベントも好評いただいており、9月29日には『土佐の魅力再発見』と題し「土佐南学」「絵金の世界」「土佐琵琶の演奏」「土佐日記の魅力」「歌人紀貫之」についての公開講座を開催しました。東京外国語大学総合国際学術研究院教授の村尾誠一氏をはじめ皆様にご協力いただき、4時間を超える講演会となりましたが、参加者の方々からは、「充実した時間でした。」と感動の声をいただきました。

関係各位のご協力のもと、展示やイベントを通して、来館者の皆さんに楽しんで頂ける展覧会を目指して開催しておりますので、是非、お立ち寄りください。

(学芸課長／津田加須子)

紀貫之と『土佐日記』展

平成25年 **9月28日(土) ～ 11月24日(日)**

会　場：**高知県立文学館 企画展示室**　**会期中無休**

観覧料：**400円**（常設展含）　開館時間：午前9時～午後5時(入館は午後4時半まで)

◆関連企画のご案内◆

■藤並の森　野守草コンサート

・開催日：11月4日(月)　午後2時～　午後3時～
・場　所：文学館前藤並の森　雨天時は文学館ホールで開催。
・内　容：NPO法人こうち音の文化振興会の皆さんの演奏でお楽しみいただきます。
・参加費：無料

■文学散歩「土佐日記の旅程を辿る」

・開催日：11月7日(木)
・内　容：紀貫之国府跡など土佐日記ゆかりの地を公共交通機関でまわります。
・定　員：30名（電話又は文学館受付にてお申し込みください。）
・参加費：3,000円程度

■「いにしえ」の世界へ旅しよう ～紀貫之と紫式部が文学館へやってくる～

・開催日：11月9日(土) 午前11時、午後2時　・場　所：高知県立文学館　1階ホール、ロビー他
・内　容：紀貫之と紫式部が文学館へやってきます。二人と一緒に写真を撮りませんか。
・参加費：要当日観覧券　協力：紀貫之まつり実行委員会

他にも毎週土曜日の午後1時30分より展示解説、11月2日、3日には、クイズイベントの開催等盛りだくさんの関連企画を準備し、お待ち致しております。

高知県立文学館ニュース　第63号　平成25年10月25日発行　〒780-0850　高知市丸ノ内1丁目1番20号　電話088-822-0231　FAX088-871-7857

高知県立文学館 カレンダー　10月～1月

企画展案内

紀貫之と『土佐日記』展

9月28日(土)～11月24日(日)　場所：企画展示室　観覧料：400円(常設展含)

我が国最初の日記文学として知られる紀貫之の『土佐日記』は、貫之が土佐守の任を終えて京に帰る55日間の旅を綴ったものです。展覧会では、紀貫之と彼の残した『土佐日記』の世界を当館所蔵の資料を中心に紹介し、郷土の古典文学に親しんでいただきます。

鹿持雅澄著「土佐日記地理辯」旅程図より／安政4年(1857)

展覧会の紹介をしています！詳細は７ページをご覧ください。

※年末年始のため、12月27日(金)～1月1日(水)は休館いたします。
新年は**1月2日(木)**より開館いたします。

近代文学のあけぼの展

12月7日(土)～平成26年1月31日(金)
場所：企画展示室　観覧料：400円(常設展含)

高知県出身の自由民権の志士たち、坂崎紫瀾、宮崎夢柳、植木枝盛らは、外国文学の翻訳や口語詩の試みを行い、日本の近代文学に大きな影響を及ぼしました。

三人を中心に、近代文学のあけぼのと高知の人々との関わりをご紹介します。

(※12月27日～1月1日は年末年始のため休館となります。)

©JET

展覧会の紹介をしています！詳細は表紙・2・3ページをご覧ください。

第16回 児童生徒文学作品朗読コンクール

当館では、朗読を通して文学に親しむ子どもたちを育てたいと願い、毎年、朗読コンクールを開催しています。子どもたちが一生懸命練習した朗読を聞きに、ぜひ、会場へお越しください。

◆県審査(公開) 表彰式・記念講演会があります。

会場：高知県立文学館ホール
日時：11月10日(日)午後1時～

地区審査で選出された児童生徒の公開審査および表彰式・記念講演会を開催します。

サイン会も開催します。

記念講演会開催

講師　「よこしまくん」シリーズ、第4回MOE絵本屋さん大賞第4位「へんなかお」の作者、
大森 裕子先生

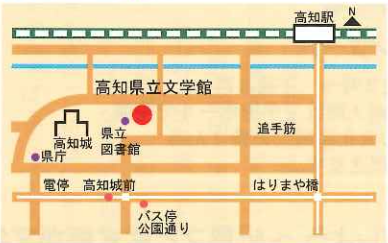
白泉社「へんなかお」　徳成社「よこしまくん」

利用案内

開館時間	午前９時～午後５時（入館は、午後４時半まで）
休館日	年末年始(12月27日～1月1日)を除き、無休。 ※その他メンテナンス等で臨時休館することもあります。
観覧料	一般350円　企画展はそれぞれ異なります。 20人以上の団体は２割引。高校生以下無料、 高知県・高知市長寿手帳、身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳、戦傷病者手帳および被爆者健康手帳をお持ちの方とその介護者１名は無料です。
駐車場	なし。ただし近辺に有料駐車場があります。
附帯設備	ホール、ミュージアムショップ、こどものぶんがく室、茶室「慶雲庵」
貸出施設	企画展示室、ホール、茶室

E-mail：bungaku@kochi-bunkazaidan.or.jp
http://www.kochi-bunkazaidan.or.jp/~bungaku/

交通のご案内



- 高知龍馬空港より空港連絡バス〈県庁前行〉「公園通り」下車　北へ徒歩５分
- JR高知駅下車徒歩20分(またはバス・路面電車を利用)
- 土佐電鉄電停高知城前下車北へ徒歩５分
- バス停公園通り下車北へ徒歩５分

高知県立
文学館
〒780-0850
高知市丸ノ内１丁目1-20
電話　088-822-0231
FAX　088-871-7857